『人類学研究所 研究論集』第 7 号（2019）
Research Papers of the Anthropological Institute Vol.7 (2019)

宮古島から那覇市への戦後移住に関する研究
――辻・若狭に居住する移住経験者を事例とする調査報告――

菅沼　文乃

キーワード
那覇市、宮古島、戦後移住

１．はじめに――本研究の目的と先行研究の概観

近代以降、沖縄からは多くの移住者が送り出されてきた。その移住先は、沖縄戦前は県外、国外が中心であったが（近藤 1995: 116-117; 喜山 1994）、戦後になると那覇市などを中心とする県内都市部への地方部からの移動も盛んに行われるようになる。本研究は、この県内から那覇市への移動について、1960 年代前後に宮古島から辻・若狭地域に集中的に移り住んだ人々に焦点を当て、彼らの移住を支えたものと、故郷・現住地との現在のかかわりについて整理することを目的とする。

本研究では主に、筆者が 2008 年から断続的にフィールドワークを実施している那覇市辻・若狭において 2018 年に得た事例をあつかう。この地域で暮らす宮古島出身移住者についてはこれまで拙稿で何度か触れてきた（菅沼 2012, 2017）が、今回は移住の受け入れ先となった地域の特性に焦点を当てて彼らの移住経験を再整理し、彼らの移住の経緯と現在をあらためて検討したい。

また、沖縄移民についての研究はこれまでに数多くなされている（石川 1968, 1989, 1997, 2010; 喜山 1994; 近藤 1995; 村川 2001; 松下 2012; 山里ほか 2016; 加藤ほか 2018 など）ものの、多くは沖縄から国外・県外へ、また国外・県外から沖縄への移民を取り上げるものであり、沖縄県内での戦後移住、なかでも労働移住に焦点を当てる文化人類学的・民俗学的研究はいまだ十分ではないように感じられる。本研究はこの補足も目指す。

1-1. 沖縄からの移住の展開

まず、近代以降の沖縄から県内外への移住がどのように行われてきたのかを、先行研究から整理する。近代以降の沖縄から県内外への移住・移民の増加は、地割制に象徴される琉球王国期の土地制度が明治政府主導による土地整理事業によって解体されたこと、その結果耕作者の土地の私的所有が認められ土地の売買が可能となったことに端を発する（安里ほか 2004: 277-288）。最初の大規模な人口移動は 1920 年代から 1930 年代初頭までであり、世界恐慌・昭和恐慌のなか、多くの労働力が県外に流出した。とりわけ、同時期に生じた砂

糖価格の急落[1]は沖縄経済の主軸であった製糖業に大きな打撃をあたえ、原料のサトウキビを生産する農村からは離農者が続出した。

農村を離れた労働人口の多くは、国内外への出稼ぎ労働に従事した。国内へは、1920 年代以降、阪神地区や京浜地区の紡績工業地帯での低賃金労働者として雇用され、定住にいたる者もあった（沖縄県教育委員会(編) 1974）。国外へは、1900 年のハワイ移民以降、とくにサトウキビ・綿プランテーションでの雇用契約を有する契約移民および自由移民が各地へ送り出された[2]（安里ほか 2004: 282）。沖縄からの移住者は移住先での生活基盤の確立に奔走し、さらに国外の場合は日系移民社会のなかでの差別にも直面したが、同郷者同士の相互扶助を目的とするコミュニティを形成することでこれを乗り越えていった。生活が安定した者のなかには、故郷への仕送りだけでなく、家族や近親を移住先へ呼び寄せる動きもみられた。

沖縄戦後は、県内の人口急増に対応するべくとられた米軍政下の移民政策のもと、南米を中心として国外への労働移民が盛んに行われた（石川 2010）。一方、日本経済が高度成長期を迎えると、低賃金の労働力を求める京浜・関西・中部地方への集団就職[3]がはじまり、国外への移住は減少していった。また県内での移動も目立つようになった。この多くは、経済状況の変化にともない、現金収入を求めて都市部に流入した本島北部や離島地域からの労働者であった。彼らは那覇市などの戦前から商業の中心であった地域や、米軍基地の建設により基地関連の雇用需要が高まったコザ市などへと集中的に移住した[4]。さらに、市街開発や米軍基地・軍用地の設置にともない居住地が接収されたために、移動を余儀なくされたケースも各地でみられた（越智 2015）。このような戦後の国外・県内外の移住に際しても、同郷コミュニティが移住初期の不安定な生活を支える役割を果たした。

近代以降の沖縄の移住には、戦前においては雇用主との労働契約を前提とした大規模な契約移民がみられたのに対し、戦後はそうした契約を前提としない移動や、近親者の呼び寄せに応じる形での個人単位での自由移民が目立つようになるという流れをみることができる。しかし、移住先で結成された同郷コミュニティが移住の成功・定住化の一助となったことは、戦前・戦後、および国外・県内外への移住に共通している。

1-2. 沖縄社会の移動・移住と親族・地域関係の関連

続いて、親族関係、地域関係からみた沖縄の移動・移住の研究について概観する。

---

[1] とくに農村部では救荒食であるソテツを常食しなければならず、またソテツの加工が不十分なために食中毒による死者が出るほどの苦境であったことから「ソテツ地獄」とよばれる（安里ほか 2004: 277-280）。

[2] 1920 年代後半では南洋・南米・台湾などへの日本全体の移民の 20%前後を沖縄出身者が占めた（安里ほか 2004: 282）。

[3] 1972～1981 年度の間に中・高卒就職者は 4 万 3200 人、全体では約 9 万 9800 人が東京・神奈川を中心に就職した。一方で 1978 年から 1981 年の間に約 1 万 2000 人が沖縄に戻っていることから、集団就職には出稼ぎとしての側面もあったことがうかがえる（城田 2008）。

[4] 本研究の事例となる那覇市では、宅地開発や公営住宅の建設にともない、他地域から多量の人口が流入・定着した（黒田 2000）。1954 年、57 年に周辺市町村との合併があったものの、それ以外の年も人口は同程度増加していることから、述の那覇市への多量の人口流入があったことは確かである（那覇市企画調整課 2016: 2-3）。

沖縄の親族関係は、父系血縁原理に基づく祖先祭祀に関連づけて説明される（比嘉（春） 1959; 比嘉（政） 1983, 1986, 2010; 湧上 2000 など）。祖先祭祀の対象となるのは祖先の位牌や墓であるため、移住した後も家や出身地域に残った親族との関係、あるいは移住先にもち込んだ親族関係を通して故郷の位牌や墓への祭祀を継続するのが一般的である。

しかしながら、移住先への定着が進むと、位牌や墓を移住先へ移す動きがみられるようになる[5]（孝本 2001: 199-218; 越智 2008; 早坂 2016; 比嘉（政） 1986 など）。祖先祭祀においては位牌は長男が引き継ぐことが原則とされるが、その家の仏壇で祀られることも重要視されるため、長男の移住に際して家に残る兄弟姉妹が預かるかたちをとる場合もある。また、墓の移動には、居住地の移動にともない生じる移住者と母村との空間的距離だけでなく、移住先での生活の長期化から生じる精神的な距離も影響することが先行の研究から指摘されている（越智 2008; 早坂 2016）。公営墓地の整備および 1980 年代以降の法人が経営する集団墓地の増加も、移住先での墓の新造に拍車をかける状況にある（越智 2015）。

居住地の移動は親族内の祭祀だけでなく、地域共同体の祭祀（＝村落祭祀）とのかかわりにも影響する。というのは、沖縄の村落祭祀は基本的に集落の発生地である創始者の家や墓、住民の生活の中心となる井戸などの場所を祭祀の対象（＝拝所）とするものであり、これらの拝所とそこに対して祭祀を行う集団の成員とが、拝所や拝所でまつられる対象との集落構造に由来する近接的関係をもつことが前提とされるためである（植松 2008）。この近接性は、村落祭祀の司祭者である根神や根人が村落の創始者の家系から輩出されることにも強調される[6] （リーブラ 1974: 178-186）。また拝所での祭祀儀礼ではその場所で祭祀を行うこと、つまり拝所の場所性が重視されるため、移住者が出身集落の祭祀に参加するには都度帰郷するなどの方法をとる必要がある。

移住者の多くは、沖縄県や市町村、地方を単位として移住先で結成された、県人会や郷友会とよばれる同郷コミュニティに所属する。前項でもふれたように、これらの同郷コミュニティは経済・政治的連帯による会員の結束、および移住者と故郷のつながりを再強化する機能をもつ（山城 2007）。たとえば、郷友会会員が同郷出身者の住居探しや就職の世話をすることがあり、生活のための基盤が安定した後も、冠婚葬祭やまとまった出費の際の相互扶助・経済補助を行う場のひとつとして郷友会は利用される（鎌田 1986）。また、同郷コミュニティは同郷出身者の連帯感を高揚し、母村の芸能などの文化要素を継承する場としての機能もはたす（戸田 1995; 石原 1980 など）。

一方で近年、とくに県内の郷友会の活動は全体的に縮小傾向にある[7]（山城 2007）。その要因は第一に、移住後の生活の長期化にともない、経済的状況がある程度改善されたことか

---

[5] また位牌が祀られる家屋（屋敷）も、祖先祭祀を行う親族関係の結節点のひとつとしてみなされている。そのため、諸々の事情で住む人がいなくなり、空き家となった家屋も祖先からの霊的なつながりを維持する意味合いで位牌や香炉が祀られ続けることがある（村武 1971: 137-140）。空き家の売買や賃貸、解体に踏み切れない所有者も多い。

[6] 司祭者以外の一般の参加者も共同体内に属する者に限られるため、たとえば寄留民などその集落の出身でない者は祭祀に関与することはなかったとされる（菅沼 2017）。

[7] 山城の調査によれば、その集落を母村とする郷友会が「ある」と答えた集落は 47 集落、71 郷友会であるのに対し、「昔はあったが現在はない」は 8 集落となっている。なくなった理由としては「若者の非協力」「役員の成り手がいない」「親村との関係が薄くなった」に加えて「会長の高齢化」「高齢化と予算不足のため」があげられている（山城 2007）。

ら物的・金銭的な相互扶助がそれほど求められなくなっていること、第二に移住の最盛期を過ぎ郷友会成員の中核を占めてきた移住経験者の高齢化と後継者の欠如である（菅沼 2012）。実際、会自体の廃止とまではいかなくとも、運動会、成人式等のイベントが廃止された郷友会もある（小林 ・後藤 2000）。郷友会はその役割を終え、衰退の一途をたどっているのである。

２．那覇市辻・若狭地域の概要

現在の那覇市は、首里地区、真和志地区、小禄地区、那覇地区の 4 区画に区分されており、本研究であつかう辻・若狭はこのうち那覇地区に属する。那覇地区はもともと、自然の海岸線から離れた浮島のような地形を呈していた。15 世紀なかばに首里地区と那覇地区を結ぶ橋（長虹堤）が建設され埋め立てによる整備が行われると、人口集中が進み、那覇地区は中国を中心とする諸外国との交易の要点としての役割を担うようになる。

本節では、辻・若狭の地域的特徴について、現在までの歴史をたどりながら確認する。

2-1. 辻地域

本研究で対象とする地域のひとつである辻は、主に冊封使や上階級の武士を相手とする遊郭[8]として 17 世紀に設置された （那覇市企画部市史編集室 1985: 417-422; 那覇市企画部市史編集室 1979; 加藤 2011 など）。辻遊郭の創設について、琉球王府の正史として編纂された『球陽』には、以前から行旅人を客とする売春を生業とする者が周辺に多くおり、それを取りまとめるために遊郭が設置されたという記述がみられる[9]。ほかにも琉球王府の王女が辻の開祖となったとする説、近隣の寺院の座主が寺院敷地内で売春をあっせんしていたことを起源とする説があるが（那覇市企画部市史編集室 1979: 128-130）、この検討については別の機会に譲ることとし、ここでは対外交易の要点に位置するという那覇地区の地域性が辻に遊郭が配置される大きな要因だったことを指摘するにとどめる。

人工的に形成された、女性のみからなる辻遊郭は、沖縄の村落一般には見られない特徴的な社会構造を有していた。これについて、紙幅を割いて説明しておく。

辻のジュリ（遊女、娼妓）の多くは、4～5 歳から 10 歳前後に沖縄中から前借金と引き換えに連れてこられた、一般家庭の出身であった（那覇市企画部市史編集室 1979: 139）。彼女たちは抱親をアンマー（母親）と呼び、同じ抱親のもとに属する抱妓同士はチョーデー（兄弟）と呼び合う疑似家族関係を形成した。ジュリとなった者は遊郭での仕事を通して前借金の返済を目指し、返済が完了した者は自由の身となることが許された。そのなかには抱妓をとり、あらたな抱親として妓楼を構える者もいた。

---

[8] 辻は運営やサービス形態など、本土の遊郭と比べて異なる性質が多くみられるため、遊郭という表現に難色を示す者もいる。しかし本論では参考文献の記述に倣い、暫定的に「遊郭」という語を用いることを断っておく。

[9]「辻・仲島の二邑を創建す」と題し、1664（尚貞王 4）年の年、「往昔の時、辻、仲島の地は茫々たる曠野にして稜蔬菜離々蒼々として居民あることなし。この年王命を題請し始めて宅を闢き邑を建て那覇に属せしむ。而して今妓女多くこの地に住みて以て旅客を待つ」（那覇市史編纂委員会(編) 1968）とある。

ジュリたちが居住する屋敷は妓楼を兼ねており、ほとんどは貸家であった。一軒の屋敷にいくつかの抱親が同居し、彼女らが抱えるジュリとの共同生活を送った。妓楼を訪れる客との間に子が生まれることは珍しくはなかった。ジュリの子のうち、女児は、遊郭内でジュリである母親と生活を共にし、その跡継ぎとする例が多くみられた。一方男児は 12、3 歳ごろまで母親のもとで養育された後、ジュリの故郷の実家に預けられる、あるいは父親が本妻との間に男子がない場合、とくに父親が士族であった場合には、父親が引き取って育てたり、また籍に入れなくても家に出入りさせて位牌を拝ませることも多く行われた（那覇市企画部市史編集室 1979: 139; 日本弁護士連合会(編) 1974; 太田・佐久田 1984; 那覇市女性史編纂委員会(編) 1998: 387)。また、父親には養育の責任はとくにないとされた。

これらの理由から、屋敷には位牌、およびそれを祀る仏壇は置かれなかった。葬儀も基本的に遊郭内で行われることはなく、遊郭で死亡したジュリ、あるいは病に倒れ回復する見込みのないジュリは故郷に送られ、葬られた[10]（那覇市企画部市史編集室 1979: 141)。

以上のことから、辻遊郭内では位牌や墓を対象とする父系血縁は存在せず、それに基づく祖先祭祀および屋敷地の継承は基本的には行われてこなかったと考えられている。例外的に、辻遊郭の開祖とされるウミナイビらの位牌祭祀および清明祭が行われていた（那覇市企画部市史編集室 1979: 135）が、ウミナイビの位牌は寺院に祀られ、清明祭はウミナイビの墓所とされる遊郭内の拝所で実施されていたことから、これも祖先祭祀というよりは地域の祖神に対する祭祀実践という理解のほうが適切であると思われる。

男性のいない辻遊郭では、抱親から選出される役員である盛前（ムイメー）による独自の自治組織が形成されていた。遊郭で最も重要視される年中行事であるハチカショウガツ[11]においては、盛前が神事とそれに付随する芸能「ジュリ馬」の采配をこなし、遊郭の自治運営のための減税などの対外交渉なども彼女たちが行っていた（那覇市企画部市史編集室 1979: 129-138)。抱親を貸座敷業者とし、取締役を業者以外の男性から選ぶという貸座敷組合制度が 1920 年に成立して以降も、遊郭内の自治・祭祀は引き続き女性によって行われた。しかしながら沖縄戦の前哨となる 1944 年の 10．10 空襲で辻を含む那覇市域が焼失し、戦後の米軍による沖縄統治下で辻遊郭は廃止された（那覇市企画部市史編集室 1979: 128 など)。

現在の辻は、壊滅した遊郭跡地をもとに湾岸の埋め立てを繰り返して整備された。戦後まもなくは那覇市街地の多くが米軍の接収を受けていたため、戦火を逃れたジュリも沖縄各地へと移り住み、料亭や飲食店を経営していたという（加藤 2011: 188-192)。一方で朝鮮戦争特需に沸いた沖縄では、戦災被害による貧困を背景とした街娼の急増と、第二次大戦中から多発していた米兵による性犯罪の増加が問題となっていた。そのため、飲食店や料亭、ホテルで売春にかかわる営業を行う米軍関係者向けの特殊飲食街の設置が検討され（加藤

---

10 故郷に縁故の薄くなった者、肉親と連絡の取れない者、身寄りのない者は、辻遊郭の北部に隣接する辻原墓地の一角に 1 坪ほどの土地を借りて仮の墓をつくり、そこへ葬る場合もあった（那覇市企画部市史編集室 1979: 141）。辻原には 14 世紀以降琉球王国の有力者の墓が立ち並んでいたが、後述する 1953 年からの区画整理で移転され、現在は残っていない。

11 旧暦の 1 月 20 日にあたる日に行われ、奉納舞踊であるジュリ馬の舞手とシシやミルクをともなったカミンチュが辻遊郭内の拝所に参拝する、豊年と商売繁盛などを祈願する行事である（塩月 2000; 古塚 2008)。ジュリ馬の舞手は遊郭内でも美しさを誇るジュリから選ばれた。

2011: 28-54)、辻も、朝鮮戦争・ベトナム戦争に向かうために那覇港周辺に逗留していた米軍関係者向けの特殊飲食街という、風俗営業取締上の地理空間的な「囲い込み」に応じる形での再開発にいたった（高里 2001; 加藤 2011: 186-192)。

このように、辻歓楽街の形成は戦前の遊郭からの連続的な「再興」ではなかったといえるが、その第一歩となったのがジュリ出身である上原栄子が開業した料亭「松乃下」にあることは言及しておきたい。彼女は松乃下の開業について、米軍による都市計画とそれにともなう市内整備が入る前に、辻遊郭の拝所を辻遊郭にゆかりのある者の手で保存しようとする意図があったことを、自伝的作品『辻の華』で述べている（上原 2010: 252-298)。実際、拝所周辺の土地購入にあたっては、遊郭期の抱親数名が代表者地主となり、上原がそこから土地を借り受ける形式をとっている[12]（上原 2010: 266)。

松乃下の開業以降、辻には米軍関係者向けの営業を行う飲食店が増加し、隆盛を極めた。このなかには宮古島や他地域からの移住者が経営するものもあった。しかしながら、ベトナム戦争の泥濘化にともなう米軍関係者の購買力の低下と 1972 年の日本復帰にともなう日本人観光客向けの観光業成長（安里ほか 2004: 301-319）および風俗営業取締法の制定、売春観光の禁止（多田 2008: 91-92)、那覇市松山を代表とする新たな歓楽街の発展などから現在客足は遠のいている。

辻では現在も遊郭期以来の祭祀であるハチカショウガツとジュリ馬が実施されている。これらは遊郭の廃止により戦後中断されたものの、1953 年に料亭を経営する那覇市料理店組合・バー組合・ホテル組合を主体として、1968 年からは主体を自治会にかえて復興された。しかしながら日本復帰に前後して遊郭の祭祀としての性質は薄れ、市の観光イベントとしての色を強めたものであったとする指摘もある（塩月 2000)。さらに、女性権利団体の活動の強まりから、「遊女の祭り」であるジュリ馬は 1989 年から再び中断された。

2000 年以降、ジュリの関係者が経営する料亭などの辻遊郭に何らかの縁をもつ者が結成する法人を主体として、ジュリ馬は再開された。現在は法人主導のもと、旧暦 1 月 20 日にジュリを養母にもつ女性を司祭として神事を行い、その日に近い日曜・祝祭日にジュリ馬を披露する形態をとっている。当日にはメディアや県内外からの見物客が訪れ賑わいをみせており、「遊郭」の祭祀への外部の印象は軟化しているように感じられる。2018 年には遊郭創設 350 年を迎えた記念として、法人と自治会がかかわり市長によるジュリへの献花式も行われている。

2018 年 9 月の時点で人口は 2511 人（一丁目 1563 人、二丁目 948 人)、自治会は 1955 年結成、2008 年時点での加入世帯は 333 世帯であり、その大多数が宮古出身者である。

2-2. 若狭地域

辻に隣接して、本研究のもうひとつの調査地域である若狭がある。戦前の若狭と辻は、本土の遊郭のような塀などによる区画割りはされておらず、空間的に明確な境界がもうけられていたわけではなかったが、その地域性は全く異なるものであった。

若狭は琉球王国期より「若狭町」と呼ばれ、土壌と地下水の獲得に利点があったことから、

[12] 屋敷地を所有・継承する概念が薄かった辻遊郭では、拝所はジュリたちの誇りとアイデンティティのよりどころであったことが『辻の華』からはうかがえる（上原 2010: 252-298)。

戦前までは農業が行なわれていた（那覇市企画部市史編纂室 1979: 247-248; 若狭一丁目自治会 2016: 55-60）。若狭の農業は当時の那覇で最大規模を誇り、タバコやナス、葉物野菜などが生産され、若狭の名を冠する大根は戦前まで広く知られていた。また、琉球王国期以来、随一の漆器生産地でもあった。若狭で作られた漆器は琉球王国期の輸出品・朝貢品として重宝され、琉球王国解体後も県や市の援助のもと一大産業として奨励されたが、戦後に市内の別地域に工房が移転し、現在若狭内で漆器生産は行われていない（那覇市企画部市史編纂室 1979: 374-382）。

外交・交易拠点であった那覇港近くに位置していることからか、地域内には現在も護国寺などの寺院、琉球王国の社参の対象であり明治以降には官幣小社ともなった波上宮、隣接する久米に寄留・定住した中国系移民が信仰する孔子廟など、多様な信仰形態を呈する拝所が混在しており、後述する祭祀の際の巡拝路にも組み込まれている。

沖縄戦では辻同様戦火を受け、戦後は米軍の物資集積所となったことから、一般の立ち入りは禁止された。そのため、疎開していた若狭住民はもとの住居に戻ることができず、近隣に居を構えたり、仕事や学校の都合で疎開先に残る者も多かったという。また、この頃戦前の地理区分や拝所は失われた。若狭が開放されたのは1952年、それも一部開放のみであり、以前の土地に戻ることのできない旧住民も依然多くいた。また現在の国際通りの道路拡張整備にともない立ち退きを迫られた那覇市牧志の一部や、米軍港用地となった那覇市垣花などの住民が随時若狭に移転先を割り振られ、移入した（若狭一丁目自治会 2016 : 55-60）。それとは別に、旧所有者が戻らない土地を求めて移入する者も多かったという。

1960 年代以降、沿岸部の護岸・埋め立て工事が行われるなか、沿岸部には水上店舗と呼ばれる海面に張り出した形での飲食・遊興店舗が設営され、米軍関係者を主要客層として好収益をあげた。また一丁目では辻歓楽街の客層を取り込んでのホテル営業も活況を呈した。この好景気のもと、現金収入を求めた宮古を中心とする他地域からの労働移住が盛んとなった。とくに宮古からの移住者は、この時期に若狭に居を構えたケースが多い。これは 1948 年に再結成されていた宮古郷友会（1931 年発足）による住居や就職のあっせん、生活基盤づくりのための資金貸与業務を活用した移住であり（在沖宮古郷友連合会 1980: 20-21, 51）、沿岸部には宮古出身者が住むバラック小屋が密集していたほどだったと地域住民は語る。しかし、沖縄の日本本土復帰に前後して、辻と客層を同じくしていた一丁目のホテル業も一時の勢いはみられなくなっていく。また当時の建築基準を満たさなかった海上店舗に対する撤去勧告と火災での消失も、影響として大きいだろう。

こうした経緯から住宅街化が進む若狭であるが、現在も農業に関連する祭祀儀礼が年 2 回行われている。ただ、戦後の住民構造の変化を理由として、現在祭祀にかかわるのは若狭出身の住民には限られなくなっている。2010 年代に神事を執り行っていた司祭者も戦後に他地域から移住しており、「他に拝みかたを知る人がいないから」と自治会婦人部に依頼され、祭祀にかかわるなかで若狭の拝所について学んだのだという。2017 年ごろに彼女が亡くなってからは、婦人部の主導のもと、彼女のやり方にならって儀礼を行っているようである。

若狭の人口は 2018 年 9 月の時点で 4445 人（一丁目 895 人、二丁目 1385 人、三丁目 2165 人[13]）、自治会は一丁目 1958 年、二丁目 1992 年、三丁目 1999 年結成、加入世帯数は

[13] 三丁目は戦後に海岸の埋め立てによって造成された地区であり、市営住宅を中心とした

順に 148、201、144 世帯である。閑静な住宅街を歩くのは地域内の寺社をめぐる観光客、地域内のビーチを訪れる海水浴客が中心であり、歓楽街としての姿は一見なりをひそめているが、一部には現在も沖縄有数のホテル街としての景観が残されている。

３．宮古出身者の移入

前節でみた通り、ドル経済下の沖縄において米軍関係者向けの商業地であった辻・若狭には、現金収入を求める農村部や離島出身者、とくに宮古島からの移住者が多く移り住んだ[14]（那覇市総務部女性室那覇女性史編集委員会 1998: 273; 若狭一丁目自治会 2016: 59）。本節では、2018 年に行った聞き取り調査のデータを中心に、この時期に移住を経験した宮古出身者の移住経験者の移住当時の状況と、現在の宮古および辻・若狭とのつながりを見ていく。

事例 1：T さん（女性、85 歳、宮古島 H 市出身）

宮古のサトウキビ・タバコ農家に嫁いだが、相次いで干ばつや台風被害をうけたことをきっかけに、日本復帰前に那覇市に出稼ぎにきた。移住にあたっては既に辻にいたオジ、オバや仲人と夫が相談し、住居も用意してもらった。のちに辻に現在の住居を購入した。

現在は 3 年に 1 回くらい、両親の年忌や兄の年忌、法事のときだけ宮古に帰る。両親は死亡しているので、もう宮古に帰りたくないと思うこともある。夫の実家は売却し、仏壇は現住居にひきあげたこと、先祖代々の墓を 3、4 年前に霊園に作ったことも、宮古に帰らない理由のひとつである。

知人も今は現住地周辺のほうが多い。以前は同じ集落の出身者と郷友会などいろいろな活動をしていたが、みなを取り、亡くなった人も多い。

事例 2：U さん（女性、85 歳、宮古島 H 市出身）

20 歳で結婚、50 年ほど前に家族で故郷を離れた。すでに那覇市内でホテルを経営していた夫の兄やイトコの助けを借り、若狭で 20 年ほど地域住民向けの小さな雑貨屋を経営したが、夫の病気をきっかけに店をたたみ、辻に自宅を建てた。

現在は、夫の兄弟や親戚も沖縄本島にいることもあり、旧盆や年忌のために宮古に帰ることはない。墓は首里の墓地に購入し、先祖の位牌は夫の兄弟が移住先に移している。故郷に帰りたくないといったら嘘になるが、宮古にはもう身内はおらず家や墓もなく、知り合いもいないし、もうなにもわからないので帰りたいともいいきれない。

逆に、辻に来てからの知り合いはたくさんいる。現在は高齢者向けの趣味活動に参加しており、そこで交流する宮古出身の知り合いも多い。ただ、その知り合いは宮古にい

住宅街となっている。そのため、戦前から戦後までを検討する今回の議論の射程には含まれていない。

[14] 1980 年の時点で 1317 世帯が宮古島から那覇市内に移住している。その他の地域への移住は 6815 世帯であり、大多数が那覇市内に移住したことがわかる（在沖宮古郷友連合会 1980）。

たときからの知り合いではない。出身集落の郷友会に参加しているが、現在の活動は月 1 回のグランドゴルフのみで、メンバーも高齢化のため少なくなっている。子は、移住後に入学した学校の交友関係があるので郷友会には参加していない。

事例 3：S さん（女性、78 歳、宮古島 H 市出身）

実家は農家で、自家消費用の芋などに加えて戦後は換金作物を作っていた。夫はサトウキビ工場に勤めていたが、現金での収入が少なく、生活に十分ではなかったため夫、子 2 人と那覇に移住した。若狭でホテルを開業するため、すでに那覇に来ていた親戚を頼り、銀行をまわって資金を確保した。

両親の仏壇は長男である兄が宮古で管理している。兄弟は宮古にいるので、年に 1、2 回祝い事の際に帰る。夫が長男であるため、夫の両親や先祖の位牌は現住居に、墓も今は沖縄本島に移しているので、旧盆などで宮古に帰ることはない。宮古の出身集落には内地の人が多く移住しており、知らない人ばかりになってしまったので、今は宮古に帰りたいとは思わない。

所属している郷友会は現在はほとんど活動していないが、宮古で行われる高校の同窓会の活動に参加している。同窓会には同じく島を離れているほかの同級生も帰郷する。幼少期から中学までみな同じクラスなので、にぎやかで楽しい。

子は、那覇での友人づきあいがあり、郷友会には参加していない。以前は宮古に連れていき「ここがお母さんの元だよ」とあいさつして回ったこともある。

事例 4：E さん（女性、70 歳、宮古島 H 市出身）

高校卒業後、就職先を求めて那覇市に移り、本土にいた姉を頼って本土にわたった。本土で 1 年半働いた後那覇市に戻り、宮古出身で長男である夫と結婚した。

辻には知り合いが多く、とくに移住直後や結婚後には宮古在住時から家族付き合いをしていた S さんに世話になった。

夫の親が那覇に移った際に先祖の墓や骨を那覇に移したので、旧盆などでは現住居に親戚が 20～30 人ほど来る。そのための準備をしなくてはいけないし、たくさんの料理を作って残ってしまうので大変。

那覇市での生活のほうが長く、親戚でも若い世代は知らないので、宮古に帰りたくはない。用事があれば帰るくらいである。ただ、宮古にいたころの友人とは今も同窓会などで会う。那覇でできた友人もいるが、やはり子どものころからの友人のほうが、昔の話ができるし気が合う。

子を宮古に連れて行ったことはあるが、那覇で生まれたこともあり、宮古を故郷とは意識していないと思う。「両親が宮古」という程度だろう。

事例 5：B さん（男性、86 歳、宮古島 H 市出身）

歯科技工士になるため、日本復帰以前に妻と 1 歳だった長女の 3 人で那覇市内に移住し、その後宮古の人が多い辻に移った。同じ時期に大勢の人が宮古から（辻・若狭に）出稼ぎにきたのを覚えている。そのなかには郷友会のメンバーに保証人を依頼して資

金を用意し、ホテルや店を開く人もたくさんいた。とはいえ、好況の当時は1、2年で融資金を返却できるほどの収入が得られたため、その後店を貸し、別の事業に取り組む人も多かった。

現在は宮古にはめったに行かない。法事などの連絡がきたら行くが、連絡がないと忘れているほどである。今も宮古に親戚がいるが、屋敷はもうない。墓の移動は、自分は長男ではないのでしていないが、遺骨を小さな箱に入れて移していたようだ。

宮古に帰りたいとは思わない。宮古には遊ぶ相手が少ないし、仕事があるわけでもない。子も本土に進学・就職し、長女は那覇に戻ってきてはいるが、幼くして離れた宮古に帰ることは考えていないだろう。

宮古島出身者による辻・若狭への移住の特徴のひとつは、宮古島であいついだ干ばつや台風の被害[15]による農業の疲弊と、現金の必要性の高まりを背景とする就業を理由としていることである。不安定な経済状況にあった彼らにとって、先立って移住した宮古出身者の経済的成功は、移住への決意を固める一助となったことが推測される。

もうひとつの特徴は、移住にあたっては先行して移住していた近親や郷友会をたよったことである。郷友会の存在が移住先の選定に影響した理由は、前節で触れたように、宮古郷友会が住居の確保や生活のための資金貸付、就職斡旋等の相互扶助を中心とした活動を行っていたこと、ホテルや商店・飲食店を経営する際にも、融資の保証人依頼や模合を行う場として郷友会の役割が期待されたことによる。

移住にともなう位牌や墓の移動については、事例のほとんどで、位牌を継承するべきとされる長男の移住にあたって、位牌は移住先の住居に、墓は同時期ではなくとも近隣に移されている。移住者本人かその夫が長男でない場合は移住後に沖縄本島の霊園で墓を購入したケースが多い。

さらに、聞き取りでは移住が「出稼ぎ」という語で語られることにも注目したい。一般的に出稼ぎは、終了期間後にもといた居住地に帰る労働形態を指す。つまり、移住経験者の移住は、当初から那覇市内への定着を目的とされたものではなかったことが推測される。一方で位牌や墓の移動が「ひきあげ」と表現されることや、「もう」「今は」帰りたいと思わない、という語りからは、生活基盤だけでなく精神的な拠点も宮古から辻・若狭に移っていることが推測される。

4．考察

本節では、なにが宮古からの移住を可能にしたのかを、宮古出身者の移住の経緯と移住先である辻・若狭の地域性から整理したうえで、50 年ほどが経った現在における移住経験者と宮古および現住地の関係について検討する。

第 3 節でみたように、宮古出身者の移住のきっかけは厳しい経済状況と現金需要の高まりにあった。また移住経験者が辻・若狭を移住先に選択した理由には、出稼ぎ先に適した商

[15] 宮古島は 1959 年の宮古島台風（サラ）、1966 年の第二宮古島台風（コラ）、1968 年の第三宮古島台風（デラ）にたて続けに襲われ、主幹産業である農業に甚大な被害を受けた。

業地であったこと、すでに移住していた親族や郷友会の関係をたよることで、移住当初の生活基盤・就業基盤確立の援助が期待できたこと、の 2 点があった。

対して辻・若狭には、第 2 節でみたように、辻においては戦前の辻が父系血縁原理をもたない人工の集落であり、かつ個人の持ち家や所有地、墓がないか極めて少なかったこと、辻・若狭に共通する点としては、沖縄戦による焼失と米軍による地域の接収という空白期があること、そして若狭においては段階的な開放によって若狭に戻らない戦前の住民がいたことや、市内の他地域からの土地整備計画的移入方針によって、戦前のままの住民構成ではなくなっていたことという、他地域からの移入に有利な地域的特徴があった。結果として、宮古からの移住は成功し、移住者は辻・若狭の商業的復興に大きな役割を果たすこととなった。

当初は出稼ぎとしての色が強かった辻・若狭への移住であったが、居住の期間の長期化によって移住者の定住化が進み、精神的重心は移住後に形成された関係へと移行している。屋敷の処分や位牌・墓の移動によって親族関係の結節点が宮古にはなくなったことや、出身集落での世代交代が進み、見知った顔がいなくなっていることもこれに影響している。また、移住経験者の高齢化が宮古とのかかわりに直接影響している部分もある。郷友会での活動は会員の高齢化、あるいは死亡のため縮小を余儀なくされているし、2018 年に得た事例ではないが、帰郷しない理由に「宮古への移動にあたっての身体的負担」をあげる移住経験者にも、これまでのフィールドワークで非常に多く出会った。さらに、移住経験者の多くが、移住後まもなくの生業とした米軍関係者向けの商売から現在は離れていることも、現在の生活と移住経験との隔たりを大きくする一因だと思われる。

移住経験者の子世代と宮古とのかかわりについては、そもそも子世代が宮古での生活経験をほぼもたないため、意識されていないようである。宮古で生まれ移住を経験していても、ほとんどが幼少期のことであり、移住後に入学した学校などで形成された交友関係のほうが重要性が高まるのはある意味当然だろう。

以上のように整理すると、宮古からの移住という経験が表れる場面は、現在の生活のなかにはほとんどなくなっているようにみえる。とくに、他地域からの移入者が多く住む若狭では、成員の土地との近接性を維持するのが困難ななか、司祭者も地域出身者から選出することができなくなっている。一方で、辻のハチカショウガツおよびジュリ馬では、移住経験者は自治会成員としてジュリ馬の戦後復興の一角を担ったものの、神事には現在まで直接かかわったことはない。これは、辻の祭祀に関与する条件が、土地よりも辻の礎である遊郭との接点に求められることにもよると考えられる。

このように、祭祀の意味づけは両方とも時代とともに変化しているが、両者を比較することで、その変化も地域性をはらんでいることが示される。

５．おわりに

辻・若狭において、宮古島からの移住者は移住先の地域性と相関的に作用しあい、現在までの辻・若狭の歴史をつくってきた。居住期間の長期化によって、移住経験者の生活は現住地に定着したかのようにみえる。ただ、その端々をみることで、掻き消えたかにみえる移住の経験を彼らの側からも、地域の側からも見出すことができるのも確かである。

現在の辻・若狭は、港湾整備や外国人観光客の増加、それに合わせた再開発によって再び過渡期を迎えている。あらたな辻・若狭はどのような人々に担われていくのか、今後の辻・若狭、ひいては那覇市や沖縄において、移動・移住はどのような意味をもちうるのかを、今後も検討していきたい。

参考文献

安里　進・高良　倉吉・田名　真之・豊見山　和行・西里　喜行・真栄平　房昭
2004　『沖縄県の歴史』、山川出版社。
石川　友紀
1968　「海外移民と国内移住――沖縄勝連村浜比嘉島比嘉の場合」『地理学評論』41(9): 585-593。
1989　「沖縄県国頭郡旧羽地村における地割制の廃止と出移民――字仲尾次を事例として」『史料編集室紀要』14: 1-34。
1997　『日本移民の地理学的研究――沖縄・広島・山口』、榕樹書林。
2010　「戦後沖縄県における海外移民の歴史と実態」『移民研究』6: 45-70。
石原　昌家
1980　「疑似共同体としての郷友会組織」『沖縄国際大学文学部紀要』8(1): 74-53。
上原　栄子
2010　『新篇　辻の華』、時事通信社。
内田　隆三
2002　『国土論』、筑摩書房。
太田　良博・佐久田　繁(編)
1984　『沖縄の遊郭新聞資料集成』、月刊沖縄。
沖縄県教育委員会(編)
1974　『沖縄県史　第7巻（各論編6　移民）』。
越智　郁乃
2008　「墓と故郷――現代沖縄における「墓の移動」を通じて」『アジア社会文化研究』9: 1-28。
2015　「ゲート前という接触領域――沖縄県那覇市新都心における軍用地の記憶と返還地の開発」『コンタクト・ゾーン』7: 33-55。
加藤　潤三・前村　奈央佳・金城　宏幸・野入　直美・酒井　アルベルト・山里　絹子・グスターボ，メイレレス・石原　綾華
2018　「沖縄県系人における沖縄アイデンティティとうちなーネットワークの検討　「第6回世界のウチナーンチュ大会」に関する基礎的分析と合わせて」『移民研究』14: 1-20。
加藤　正洋
2011　『那覇――戦後の都市復興と歓楽街』、フォレスト。

鎌田　とし子
1986　「『疑似共同体』と社会運動――沖縄郷友会の分析」『経済と社会――東京女子大学社会学部紀要』14: 1-31。
岸　政彦
2004　「戦後沖縄の労働力流出と経済的要因――「過剰移動」論へのアプローチ」『都市文化研究』3: 118-136。
喜山　朝彦
1994　「移民・出稼ぎ・体験――沖縄のライフヒストリー的資料」『文星紀要』6: 45-57。
黒田　由彦
2000　「沖縄の地域住民組織――那覇市の自治会組織を中心に」『情報文化研究』11: 97-120。
孝本　貢
2001　『現代日本における先祖祭祀』、お茶の水書房。
古塚　達朗
2008　「ジュリうま」、渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也(編)『沖縄民俗辞典』、p. 265、吉川弘文館。
小林　幸司・後藤　春彦
2000　「在沖久松郷友会にみる同郷者集団の特性と同郷者の生活像」『日本建築学会計画系論文集』528: 147-154。
近藤　健一郎
1995　「沖縄における移民・出稼ぎ者教育」『教育学研究』62(2): 116-124。
在沖宮古郷友連合会(編)
1980　『在沖宮古郷友連合会発足 50 年記念誌　みやこ』、発足 50 年記念誌編集委員会。
塩月　亮子
2000　「沖縄における尾類馬行列の歴史社会学的考察――＜都市祝祭とセクシュアリティ＞研究に向けて」、日本生活学会(編)『祝祭の 100 年』、pp. 102-128、ドメス出版。
城田　愛
2008　「集団就職」、渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也(編)『沖縄民俗辞典』、p. 261、吉川弘文館。
菅沼　文乃
2012　「宮古移住民の「故郷」と精神的帰属の変化――移住第一世代の定住化の側面から」『南山考人』(40): 3-16。
2017　『老いの営みの人類学』、森話社。
高里　鈴代
2001　「特飲街の形成」、那覇市総務部女性室(編)『なは・おんなのあしあと』、pp. 268-274、琉球新報社事業局出版部。
多田　治

2008　『沖縄イメージを旅する――柳田國男から移住ブームまで』、中央公論新社。
戸田　修
1995　「那覇における郷友会の機能」、山本英治・高橋明善・蓮見音彦(編)『沖縄の都市と農村』、pp. 221-240、東京大学出版会。
那覇市企画調整課
2016　『那覇市まち・ひと・しごと創生総合戦略』、那覇市企画調整課。
那覇市企画部市史編集室
1979　『那覇市史　資料編第 2 巻中の 7』、那覇市企画部市史編集室。
1985　『那覇市史　通史篇第 1 巻』、那覇市企画部市史編集室。
那覇市史編纂委員会(編)
1968　『那覇市史資料編第一巻分冊考古・中世資料』、那覇市企画部市史編集室。
那覇市総務部女性室那覇女性史編集委員会(編)
1998　『なは・女のあしあと』、ドメス出版。
日本弁護士連合会(編)
1974　『売春と前借金』、高千穂書房。
早坂　優子
2016　「移住者家族と墓に関する一考察――沖縄県本島中南部への移住者の事例から」『沖縄研究ノート』25: 13-22。
比嘉　春潮
1959　「沖縄の民俗-親族集団」、大間知篤三ほか(編)『日本民俗学大系 12』、pp. 84-89、平凡社。
比嘉　政夫
1983　『沖縄の門中と村落祭祀』、三一書房。
1986　「琉球民俗社会の構造と変容」、竹村卓二(編)『日本民俗社会の形成と発展――イエ・ムラ・ウジの源流を探る』、pp. 77-88、山川出版社。
2010　『沖縄の親族・信仰・祭祀――社会人類学の視座から』、榕樹書林。
松下　直樹
2012　「横浜市鶴見区における移住者集団の適応戦略――沖縄出身の集団に着目して」『人文地理学会大会研究発表要旨』：86-87。
村川　庸子
2001　「成田の戦後開拓と沖縄人移民」『環境情報研究』9: 113-124。
村武　精一
1971　「沖縄本島・名城の descent・家・ヤシキと村落空間」『民族学研究』36(2): 109-150。
山里　絹子・山里　晃平
2016　「ライフストーリーにみる「郷里」との繋がり――ハワイにおける沖縄系郷友会「羽地クラブ」の成員を事例として」『名桜大学総合研究』25: 1-11。
山城　千秋
2007　「沖縄における郷友会の形成過程と今日的展開」『熊本大学教育学部紀要　人文科

学』56: 99-110。
吉川　博也
1989　『那覇の空間構造』、沖縄タイムス社。
リーブラ，W．P.
1974(1966)　『沖縄の宗教と社会構造』、崎原貢・崎原正子訳、弘文堂。
琉球新報社(編)
1980　『郷友会』、琉球新報社。
若狭一丁目自治会
2016　『若狭 1 丁目自治会　50 年の歩み』、若狭一丁目自治会。
湧上 元雄
2000　『沖縄民俗文化論　祭祀・信仰・御嶽』、榕樹書林。

Keywords
Naha city, Miyako Island, postwar immigration